北から南から

児童・生徒と地域で作る防災ツール「吾妻学園防災手帳」

茨城県つくば市　吾妻学園おやじの会
長屋　和宏

1 吾妻学園おやじの会

つくば市では、市立の全小・中学校で小中一貫教育を実施しており、「吾妻学園」は、吾妻小学校及び吾妻中学校より形成される施設分離型小中一貫校です。「吾妻学園おやじの会」は、吾妻学園の児童・生徒の保護者とそのＯＢ・ＯＧを中心に結成されたボランティア団体です（おやじの会ですが、お母さん方もいます）。本会では、学校の環境整備活動、学区内及び周辺の交通安全・防犯・防災に関する活動をしています。

2 東日本大震災の経験と伝承

吾妻学園では、引き渡し訓練や避難所に関する学習等の防災啓発活動をＰＴＡが主体となり平成 21 年より実施しています。そのような中、平成 23 年３月に東日本大震災が発生し、つくばエクスプレスの終点つくば駅に隣接する吾妻小学校には、700 名を超える帰宅困難者等が訪れ、市内最大の避難所となりました。実災害での避難所開設は、ほとんどの学校関係者が初体験でしたが、前述の活動等が活かされました。

しかしながら、震災での貴重な経験や記憶は、児童・生徒の卒業に伴う保護者の代替わり、教職員の人事異動等により、次第に失われつつありました。

このため、本会では、従前の活動に加え、災害発生の非常時や避難所を疑似体験する「学校防災キャンプ」や授業参加の時間を活用して家族で防災を考える「親子防災授業」等を震災の経験・教訓を踏まえた地域と学校及び児童・生徒、保護者が連携した実務的な活動として実施してきました。

3 吾妻学園防災手帳

上記の通り、様々な防災に関する活動をイベント的に展開してきましたが、これらは、一過性の体験や記憶に留まってしまうことがあります。このため、訓練・体験を通じた経験・課題をとりまとめ、平時より防災を意識できるツールとして「吾妻学園防災手帳」を制作しました。

「吾妻学園防災手帳」は、児童・生徒および保護者のために“カスタマイズ”した防災冊子であり、児童・生徒及び保護者は、常に携行することを基本としています。

具体的な記載内容は、地震発生時等を想定し、児童・生徒の目線では、自分の身の

学校防災キャンプ

親子防災授業

守り方や避難時のポイント、保護者目線では、学校等と連絡が取れないことを前提とした対応等について記載しています。

特に、児童・生徒の引き取りに関しては、東日本大震災の経験に基づいた記載がされています。東日本大震災を引き起こした東北地方太平洋沖地震の発生時、吾妻学園では、全ての児童・生徒が保護者等への直接引き渡しにより下校しましたが、それまでの訓練等が活かされ比較的スムーズに行われました。

一般的な児童・生徒の引き渡しでは、保護者の迎えが困難な場合の引き渡し代理人等を記した【引き渡しカード】を学校に提出し、これに基づき行われます。

しかし、東日本大震災の混乱のさなか、代理人ではない同級生の保護者等が好意で引き取りを申し出たりするケースが少なからずありました。当時、このことによる二次的な問題等はありませんでしたが、震災後の意見交換で一部の先生や保護者より反省の声が聞かれました。中でも、小さな児童が不安を抱え、顔見知りの友人保護者等と一緒に帰りたいという気持ちをどのように落ち着かせ、納得させるかが一番の問題となりました。

そのため、「防災手帳」では、【引き渡しカード】と同じ記載欄を設け、学校提出とは別に、児童・生徒及び保護者が携行することとしました。

これにより、児童らが代理人以外との帰宅を訴えても、自身のランドセルから取り出した「防災手帳」を見せることで、理解してもらう仕組みとしました。また、この仕組みは、保護者としても効果がありました。従前の訓練では、学校に提出した記載内容を忘れてしまい、訓練前に保護者が学校へ記載内容を確認したり、訓練時に代理人以外の方が来てしまったり、というケースがありましたが、保護者が携行する「防災手帳」で直接確認できるようになりました。

4 防災手帳の水平展開

「吾妻学園防災手帳」は、前述の通り東日本大震災の経験等を踏まえ、平成 26 年に初版を発行し、順次改定をしてきています。

平成 30 年からは、吾妻学園のみならず他校のモデルとなるべき資料として、つくば市内の小学校への展開が進められるとともに学校での防災学習単元との連携を図っています。この結果、児童の学習成果がその後の防災活動に活用できる形あるものとして残され、児童の防災学習への取り組みのモチベーション向上にも貢献しています。

今後は、この水平展開を進め、記載内容のブラッシュアップを図っていきます。

「吾妻学園防災手帳」（折りたたんで携行、裏面は地区の防災マップ）